「図式政治学」への試み

――政治学における図式――

小野　哲

一　はしがき

政治理論の領域で私の試みた権力基礎論・社会機能論・イデオロギー論等々は、断片的で、且全くのモノローグでしかありませんが、そのような表出、そのような発表方法をとった事由については、しばらく弁明を保留しておきたく思います。けれども、断片的あるいはモノローグ的な発表方法の背景に、それを連結するイデーが在ったことについては、発表する必要があるように思います。

「異端を攻むるは……」という古語がしばしば反省されたのですが、尚、敢て自己のイデーを体系化することに手間どって来た経過を、たとい誤解のおそれがあるにしても、それを恐れず、「図式政治学への試み」と標題して報告しようと思います。そして、手品みたいに思われるかもしれないけれど、私のイデーの断片的でない表出――あるいは私の体系の発表の方法――として、「政治学における図式」を論じ乍ら、実は「図式による政治学」の鳥瞰図を画くことを、ここに企てます。ある意味では、その図式化そのものが一そう断片的であるかもしれません。しかしそう言いだしたらキリがない、私は図式化によって従来の断片的な表出を接合し、否、従来のモノローグ的発表の背後にかくれているイデーを整頓することを試みます。また、たしかに図式化も、モノローグの徹底したものであることを否めないようです。けれども、全く別の意味で、舌たらずの者には、図式化は便利な一面があります。

二　企　図

『「図式政治学」への試み』は、未だ熟していません。しかし、その企図は明瞭でありますから、この企ての真意を表明し、関心を示される方々と、そして共鳴される方々への真情吐露といたしたいと思います。

『「図式政治学」への試み』の企図を、取あえず、方法論的な迂遠を捨てて、端的に特徴指摘によってこれを表明しますと——あわててそれを行うことは、かえって誤解の因であるかもしれませんが、いづれ方法論が理解されることで氷解するでありましょうから、とりあえず短篇的な今日的表現で、気短かな言い方を許していただくとして——

(1)『「図形政治学」への試み』の企図は、政治学の推論行程の保証を、その図形表示および図形利用によって行うことにあるということができます。

(2)『「図形政治学」への試み』は、政治学を解かる政治学（従って分ける政治学ないし別ける政治学*）に導くための手段であって、それ自体が、政治学方法論の取りくむべき一つの対象になりうるものです。

(3)『「図形政治学」への試み』の企図は、政治学の部分的・特殊的・現象的課題の「推論行程の保証」でもありますが、また、むしろ全般的・普遍的・本質的問題のための「推論行程の保証」であります。

(4)『「図形政治学」への試み』は、従って、図形を効果的に、というよりもむしろ、方法的に利用して、政治学原論、政治学概論乃至一般政治学そして国家論の——これらを総括して仮りに政治理論と通辞するなら、政治理論の——「推論行程の保証」を得ようとする試みを含みます。

(5)『「図形政治学」への試み』は、さらに、方法的に、従って結果的には効果的に、図形を使用して、政治学原論、政治学概論乃至一般政治学および国家論、即ち、いわゆる政治理論の一定部分を教授する際の整理方法——あ

えていうなら政治理論の教授法――に関する試みとすることができます。

（6）そこで、『「図形政治学」への試み』は、従来の政治理論（いわゆる前述の政治理論の一定部分の成果）を活用することにもなるのですが、しかしその企図の真意は、むしろ、新しい政治理論の開拓にあります。といっても、これは決して手前味噌をいうのではありません。ただ、「文脈」だの「教条」だのに拘泥することを、より少くして「理論の骨格」を抽出することによって、「既成理論」あるいは「古典」に示された論理を吸収し、その上に、あるいはむしろそれを超えて新しい理論を組もうとするショートカットを試みることとなのです。（その意味では、モノスゴク気短かな試みであります。）

（7）『「図形政治学」への試み』が、かくて、従来の、舶来の、古い、また最新の理論への追縦を、徒らに軽視するのではなく、ただそれへの拘泥を厭うだけであるから、それを、これ自体が一つの学説（政治理論上の固定観念**）を形成するとみなすことはできません。それは、せいぜい「政治学」の弾力性・柔軟性・可塑性の主張ないしそれへの近接を希求する流派乃至傾向を本意するのみであります。

（8）『「図形政治学」への試み』は、なおいくつかのチャンネルに分岐し、多くの応用を得るでありましょう。たとえば、（A）社会史観（いわゆる唯物史観をも含めて）を政治理論の基礎理論（先述の政治理論の一定部分にいわゆる科学的政治理論が含まれます）にするために、そのために図形政治学は特別に編成されうるでありましょうし――これをこの稿中あるいは後続の論文中に実示するのですが――また、（B）社会理論（いわゆる政治理論と部分的に交差し、且別立する理論＝この中には社会機能論や社会主体論も包含されます）と政治理論の統合を企てるときにも有効でありましょう――これも試みたことを後続論文で示します。――

（9）『「図形政治学」の試み』は、未だ活潑とはいえないかもしれません。しかし、従来それは皆無ではありま

せんでした。しかし、ここにそれの皆無でない証拠を展開することは、すでに述べた如き『「図形政治学」への試み』の企図を蹂躙することであります。既存学説への拘泥は、回避されねばなりません。政治理論否政治学一般に関心をもたれる方々なら容易に実例を思いうかべられるでしょうが、政治学を解明する図形は従来文献にかなり用いられて来ました。けれどもその図形の使用は、勿論、推論行程の保障であっても、必ずしも系統的ではありませんでした。また系統的であるとしてもそれは社会史観に及び、社会理論にまで及ぶことは稀であります。***あたかも、従来の文献に示された政治学における図形は、文脈の補助手段であるか、教説の要約であって、推論行程の保証としては、極めて消極的な意味しか与えられていないかの如くであります。なるほど、（A）一方、依然として論理における二分法は、推論の有力手段であって、いわゆる弁証法的推論と優に拮抗していますから、一挙手一投足の手間で図形化はできるといえるかもしれません。「図形は表示しないだけである。図形の素地があり、予想されている」と。また、他方（B）弁証法的推論は、思弁的であれ、ことに実証的であれ、三元的構造・三元的対立・進出そして統一をなすのでありますから、自ら図式的表示を許すものでなければなりません。「図式は弁証法をあるていど説明しうるであろう」あるいは、「弁証法は図式化されうる」と。けれども、図式化の素地・図式化の可能性は、決して図式そのものを意味しません。たとい「公式」が「図式」とよばれることがあるにもせよ。****

政治学における図式は、かくて従来、不徹底な使用をみたに止まります。といって過言でないと思います。（これが過言でありますなら、その証拠が文献的に提示されたときには、直ちにこの過言を認め不明を恥じなければならないことは当然であります。）

従来の政治学における、否、政治理論における「図式」の不徹底な使用は、その理由を―弁護の理由をも―いくらも数えうるかもしれません。けれども、それを試みることも、徹底した図形利用の立場からは、敢て不問に付しても

支障はないと思われます。なぜなら、理由は何であれ、それらの理由は、これからの徹底した図式利用を許さないものではないし、また徹底した図式利用に限度があるにしても、限度まで利用することを、それは妨げえないからであります。

そこで、『「図式政治学」への試み』は、まさに、この徹底した図式利用の政治学（政治理論）の限度をたしかめようとする作業を意味することになります。

(10)　『「図式政治学」への試み』は、すでに開始されています。たとい未熟であるにせよ、それは学界に報告され―「権力基礎論について」―文献に表示されています（同志社法学）。しかし、それは尚部分的であり表明が間歇的であり、意識的に図式政治学を表示していません。速かに一貫した、先述した企図の内で統一的表示を試みなければ、その作業に従事しているものの怠慢になりましょう。もしそれが怠慢に因るのでなければ、成果を報告しないのは、遠慮であるか独占欲かのいづれかを孕むことになりましょう。

私は遠慮をやめ、（独占の意志はなかったと反省するのですが、やはりどこかにそれが残っていたかもしれませんが）そして未熟ではあるにもせよ（それが遠慮の主因なのですが）「図形政治学」の企図を表明し、その部分を逐次発表しようと思います。もし、それが契機になって何程かの刺戟が、「文脈」と「教説」を追縦しない仕方にも良いところがあり、採り入れる方法があったのだという反応を培うことになれば、当面の目的を果したと見てよいのではないでしょうか。

以上が『「図式政治学」への試み』の企図の端的な表明であります。

＊　「分けるべきものを別けないと分かるものが解からなくなる。」田村博士は、しばしば、こういってわたしたち研究者の蒙昧と紛糾を分明にまで導かれました。

＊＊　固定観念というと語幣がありますが、学説のイデーは時折、弾力性をそこなわれることがありますので……

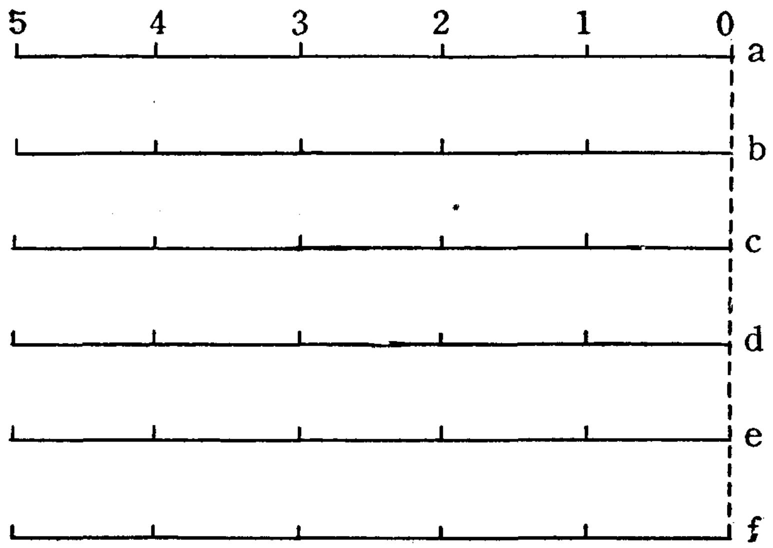
*** 図式を系統的に徹底して用いる史観、「社会史観」は、その図式利用の稀な実例です。

**** マルクス主義の史観、唯物史観の公式は、しばしば唯物史観の図式といはれることがあります。

三　展　開

展開の方法に拘泥すると際限もないから、単に『図式政治学』の概略を伝えるために、前後の順序や細部・基本の区分に頓著せず、現に同志社大学の教室の黒板に姿を表した、即ち教授法の一端に用いた図式をまとめて紹介することにします。

〔A〕図



〔A〕　時間的経過の拡大（あるいは圧縮）の図式

上図0は現在の時点を示します。１２３４５は過去への時間的距離を示します。aのX倍（あるいはaのX分の一）をbで表わし、bのX倍又はY倍をcで表すことにし、cのX倍又はY倍又はZ倍をdで表わすことにします。以下同様にしてef……を作ります。定数の置き方はどうでも任意ですが、この図式によって、例えば、――

aで宇宙史　bで地球史　cで生物史　dで人類史　e文明史　f現代史を表示させるなら、0は等しくそれぞれの歴史の現在時点を語るのですが、１２３４５の各点はそれぞれの時間的経過の次元を拡大しあるいは圧縮した過去の一定段階の時点を語ることになります。それぞれの次元、段階を表示することによって巨視的、微視的な、また粗大、微細な事実や事

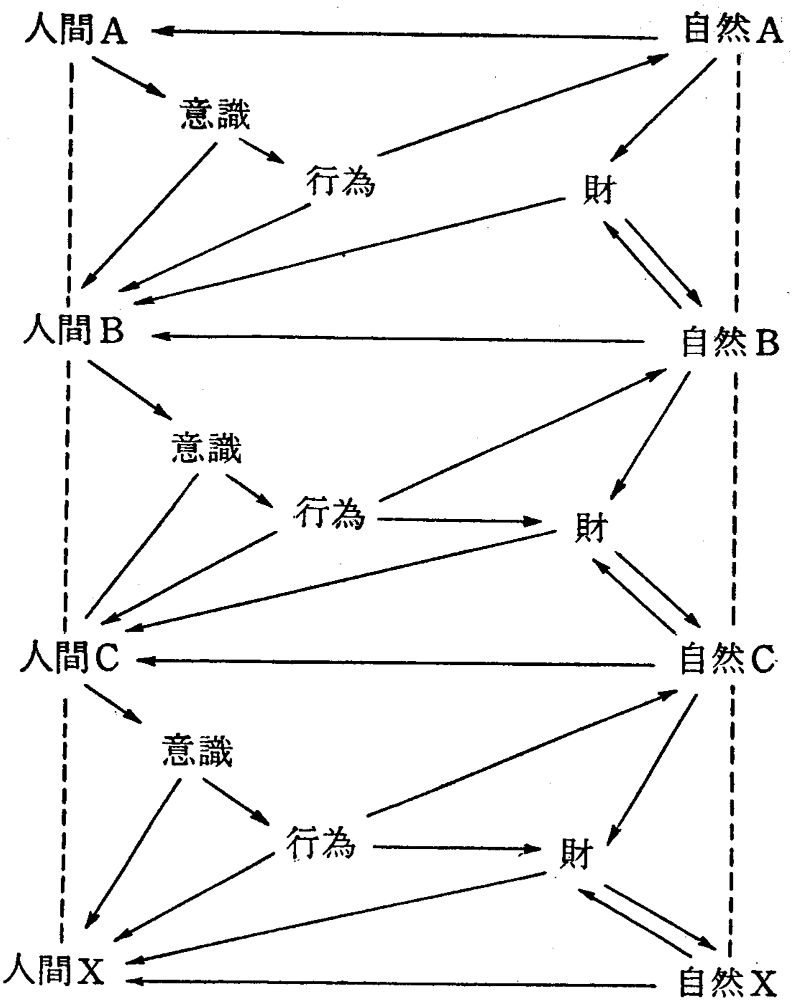
件の不用意の混淆（たとえば人類史において人間性の不変を主張することと、現代史において人間性の不変を主張することの差異への不注意を視覚的に防止する――この実例は専門家には不用にみえるが、教説、古典の集片にとりつかれた学生にとっては、認識に紛糾がありますので、必ずしも無用な表示ではないように思います。）を回避させる便宜もあります。

また、政治学がeあるいはfに主題を見出す場合にも、abcdのそれぞれは、その前提として無視できないことは当然ですが、更に、政治学の対象を、いま「政治」と称しようか、efに表示される「政治」は必ずdさらにはc乃至baにさえその理解の起点を見出さねばならないでしょう。現代史と宇宙史（これはロケット・ミサイルなどによってその結びつきが歪んで常識化していますが）生物史と文明史、人類史と現代史等々の組みあわせの上に理解される「政治」を、そうでない平板な政治史・国家史・階級史の系列内において取扱われて常識的に理解されたときの「政治」との差を意識することは、政治学の出発点において、従って政治の概念設定の上では、殊に有効であると言うことができましょう。

〔B〕 人間と自然との相関の図式

政治を人間相互間の事件（の効果）と見、また個体事象と前個体事象の複位事象（の効果）と見、さらに文化事象（の効果）として学問対象に定置する場合には、人間と自然との相関とその複合状態が、個体及び前個体の各個及び綜合の発達として理解されていることがふさわしいと思います。即ち〔A〕図の各尺度・各点における事態の内的構造を示す新たな図式は、相互関連の表示でなければならないということに思い至ります。ここにおいて、私は、田村徳治博士の「社会史観」を援用します。「社会史観」の図式は極めて豊富ですが、ここでは、「人間」と「自然」の相関を示すにふさわしい次図を採用します。

〔B〕図

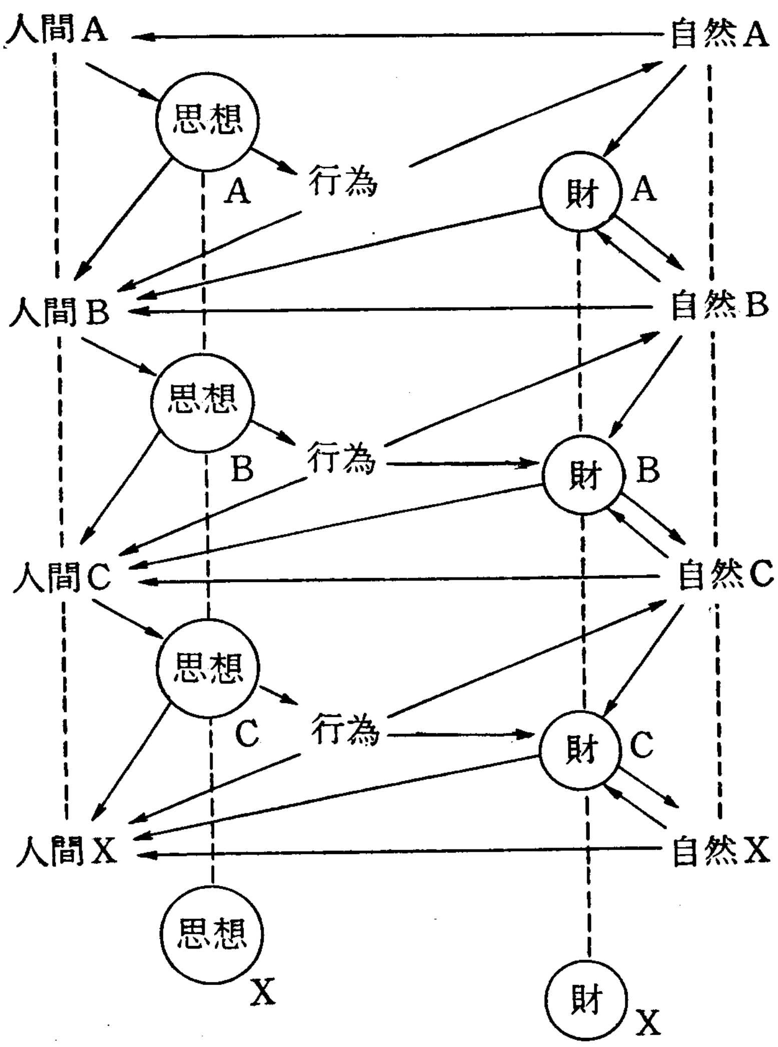


上図における「人間」は、元来、広い意味での「自然」の内に含まれるのでありますが、便宜的に、日常の思惟に即してこれを「自然」の外に置き、「自然」から働らきを受け、そしてそれ故に「自然」に対して働きかける「人間」として画きます。

さて「自然と人間の相関」。「自然」は「人間」と「財」に直接に、そして「人間」は（イ）まず「行為」を介して「自然」に、（ロ）「意識」を通じて自己に、（ハ）「行為」を通じて他者に、働きかけます。相関の結果は、「人間」の推移（人間A……人間X）に対応する「自然」の推移（自然A……自然X）が表われます。その際、「自然」A……Xの変化に対して、従来の「人間」A……Xの及ぼした影響はさして巨大でありえませんでした。（将来は？これに関しての見解は雑多で紛糾しますから、ここではふれないことにします。）相互関連の図式の中で、「意識」と「財」の蓄積を重視しますと、「人間」と「自然」の相関は、「意識」（客観化し定着した意識に重点をおいて、これを思想」と表示します）と「財」（その内で影響力の計量化される「経済財乃至文化財」を「文化財」と表示し

ます）の複雑化・多様化・量的増大・質的向上となって表わされます。（実証的にいえば、古代におけるA状況からB状況への推移には、Ａ状況に対応する「人間Ａ」「思想Ａ」「行為Ａ」が「自然Ａ」「財Ａ」と相関しており、これがB状況に対応する「人間Ｂ」「思想Ｂ」「行為Ｂ」「自然Ｂ」「財Ｂ」への相関への原因となっているということです。このA状況からB状況への推移を語る方便に、「意識＝思想」「財＝文化財（乃至経済財）」の状況をマークすること、乃至はそれをシグナル（標識）に見出すことは、推移の実証に極めて有効です。（古代人の意識と古代人の生活、生産様式の相関は、古代における「人間と自然の相関状況」の変貌の「標識」になります。）

〔B₂〕図

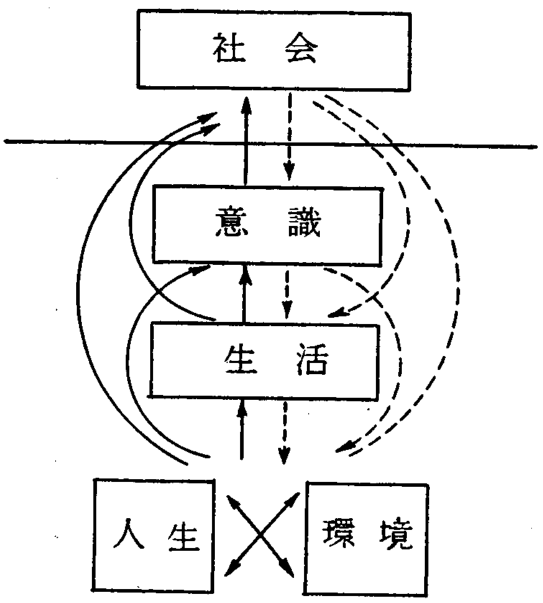


「人間」と「自然」との相関の特質は、その相関のうみだす「蓄積」にあります。即ち、「思想」と「財」の蓄積過程です。〔B〕図をここに重点をおいて画きなおすと〔B₂〕が表われます。

「自然Ａ……Ｘ」に対応する「人間Ａ……Ｘ」において、「思想Ａ……Ｘ」と「財Ａ……Ｘ」は、その蓄積の重点を形づくります。なぜなら、生命体としての個々の

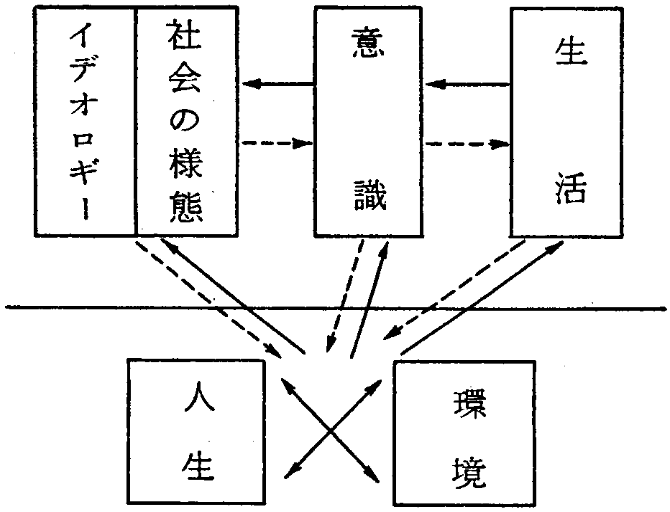
「人間」は、生れ育ちそしてやがて滅して交替し、その活動を示す「行為」も、行為のたびに消え去り、ただその痕跡を「自然と財と次代の人間」に印すだけです。（滅びる者たる「人間」が、不変のイデーへの敬意と、「財」の蓄積への執着を示すことは、まことにもっともなものがあります）「人間」の尊厳は、この「自然」との相関の内部において、その主体性の表われである「意識と財」の蓄積とそして「行為」の重大性を理解するときに明識されるでしよう。歴史を盲目とみた段階（そのような低い意識の時代）には、「人間の生活」は尚、模索本位で、ただ秩序の被護を必要とし、「生活設計」の本来の意味を実現しえない状態が対応したのでした。（「生活設計」の基本的なものを私は「政治」と概念して「政治を効果と規定する意義について」を書きました。*）

〔B₃〕図



標識者史観としての社会史観

〔B₄〕図



起働力史観としての社会史観

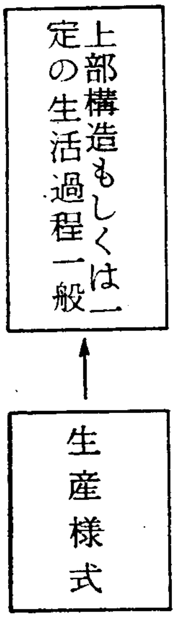
社会史観は、社会の変遷を標識に依り、又は起働力を発見して実証的に、展開しますから、これは、政治理論の根柢にあって、その基礎理論を形成するものということができます。社会史観を標識者史観として、且又、起働力史観として表

示する図形は前頁の〔B_3〕図および〔B_4〕図に示す如きものです。

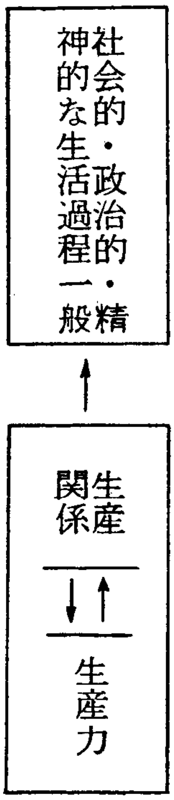
社会史観――この用語はまだ広く用いられていませんが、唯物史観あるいは史的唯物論の訳本の中においてさえ、それらが社会史観に属することを示す文章がありますので、一般はともかくとして研究者には、周知の用語ですが――まだ唯物史観ほど破究者の関心を集めていません。田村博士の「社会史観**」においては「唯物史観」について検討・批判する処があります。（その検討・批判は類のない精密なものでありますが、これは別の論文で指摘する予定です。）その田村博士の徹底した検討によれば、マルクス主義の唯物史観ことにスターリンの解明に基く唯物史観の図式は、典型的には、次のような図式に表示することができます。（尚、唯物史観の検討を便利にするために、田村博士は「定式」の段落区分と表出順序を変更したが、その「定式」の主要部分は次ぎの如く「そのまま」です。――

（A）『人間は、かれらの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意思とは独立した諸関係、すなわちかれらの物質的生産力の一定の発展段階に照応する生産関係をとりむすぶ。これらの生産関係の総体が社会の経済的構造、現実の土台をなし、その土台のうえに、法律上および政治上の上部構造がそびえたち、〔そして〕一定の社会的意識形態がそれに照応する。』ところで、（B）『社会の物質的生産力は一定の発達段階にたっすると、その生産力がこれまでその内部で発達してきた現存の生産関係、またはその法律的表現にすぎない所有関係と矛盾するにいたる。これらの関係は、生産力を発展させる形式から生産力のくびきにかわる。』しかも、（C）『物質的生活の生産様式は、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。（人間の意識がかれらの存在を規定するのでなく、反対に、かれらの社会的存在がかれらの意識を規定する）。』……（D）（E）（F）（G）省略）

〔B_5〕図

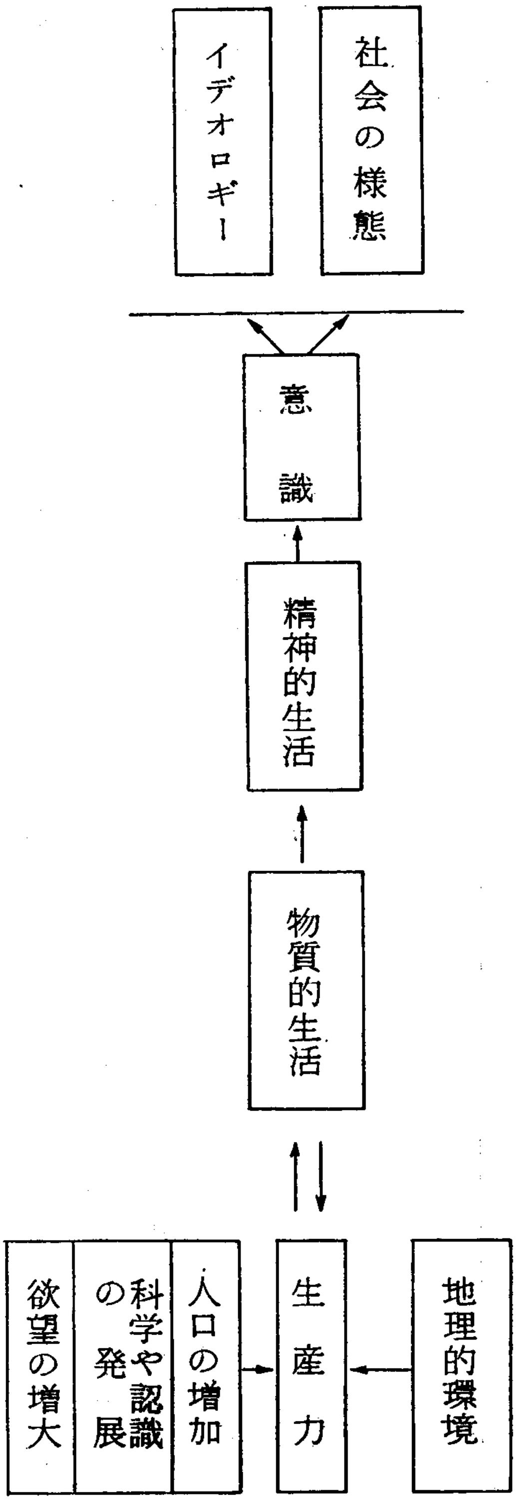


又は〔B_6〕図



そして、スターリンの解明を詳細に検討した結果を図式化すれば、

〔B_7〕図



社会史観の図式は別でありますが、唯物史観の図式は、元来それが定式あるいは公式とよばれる文章中に示されただけですから、これを決定的な固有の図式で表わすことができません。また、文章で示された公式乃至定式の理解でさえ研究者によって異なるのですから、尚更やっかいです。唯物史観の図式は（その定式あるいは公式そのものでない、これの図式は）その画きかたがまちまちです。田村博士はそこで、定め難い唯物史観の図式を五種に整理しました。右の三図はその一部です。

＊　「政治を効果と規定する意義について」同志社法学第二七号（昭和三十年）

＊＊　「社会史観」弘文堂刊（昭和卅二年九月）には二七箇の図版が組まれました。余裕があればその図版は更に増加したでしょう。また図式化の素地のままで、図でなく文字で表示された箇所は、随所にみられます。社会史観のイデーが、図式をもって保障されているとする所以であります。＊＊＊

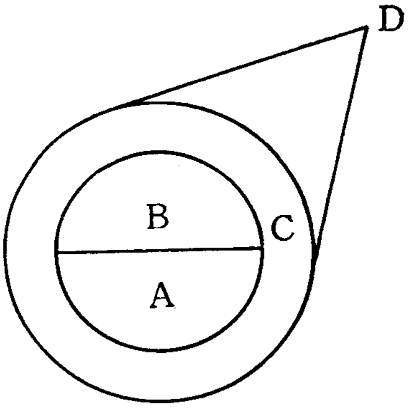
*** 田村博士の「社会史観」ならびにその図式に関して、私は、博士に幾度も直伝を得ました。その都度の内心に湧き上る感銘と、体の熱くなるような真理開眼の想いは、忘れることがありません。

〔C〕 社会機能の図式

「政治」を社会機能の一つに定置し、他の社会機能との関係を明示するため、かつ、その「政治」は「行為」としてではなくむしろ「効果」として理解すべきことを示すために、私は、次の図式を作りました。

この図式は、「政治」が、「経済や文教や防衛」と、次元を異にし乍ら、且そのいづれとも相関する、そのような「政治」の特異な綜合機能を表示するものです。「政治」が次元を異にすることを表示するために、これを円環の外に置き、二次元の平面にある「経済・文教・防衛」に対し、いわば第三次元的に、且綜合的に働きかけるものとしての「政治」を表示しようとしたわけです。ただし、表示に一種の「苦しさ」が残りましたが、それは、図式化のなしうる限界を示すことにもなりました。そこで、図式を補充するために、私は、次の表現を用いて社会機能における「政治」（機能）を特徴づけます。即ち——

〔C〕図



A…経　済
B…文　教
C…防　衛
D…政　治

経済は、社会生活の内容の積極的基礎であり、
文教は、社会生活の内容の積極的成果であり、
防衛は、社会生活の内容の消極的保障であるが、

これに対して、
政治は、社会生活の形式の積極的企画である。*

これが、社会機能としての「政治」を定置する私の表現であります。もちろん、私も、「政治」をただ社会機能としてのみ理解するものではありませんから、「政治」を理解する視角として、その視角のあり方の整頓も試みました。（同志社法学第三四号（昭和三一年）に発表しました「政治の理解に関する視角」がこれであります）＊＊

＊　拙著「政治と権力の理論」三〇頁

＊＊　同右、三一頁―八三頁。視角の種類は、三類六種。第一類　a「主体論的視角」　b「権力論的視角」　c「目的論的視角」　第二類　d「過程論的視角」　e「歴史的視角」　第三類　f「イデオロギー的視角」。以上六種を二群に再整理すると、第一群はa―e五種、第二群はf一種に区分できます。

尚、因みに、第二類のfの視角、即ち第一群の五番目に属する「過程論的視角」の項の末尾に、私は次のことを書き止めています。『過程論的視角と歴史的視角の綜合の適例は、最新の歴史科学としての「社会史観」である。』

次の図表以下は、次回にまわします。

〔D〕　権力要素の図式
〔E〕　権力構造の図式
〔F〕　社会の発達段階の図式
〔G〕　国家の変遷（発達）の図式
〔H〕　イデオロギーの図式
〔I〕　学問の構造図（政治学の構造図・国家学の構造図）
〔J〕　実践段階の図式
〔K〕　価値と計画の図式
〔L〕
〔M〕
〔N〕
…………

（未完）